

ロッシーニのポラッカとパエールのアリア

——《タンクレーディ》フィナーレとパエール(ただ 15 分だけ)——

水谷 彰良

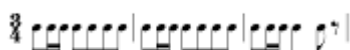
『ロッシーニアーナ』(日本ロッシーニ協会紀要)第31号(2010年発行)の拙稿「ロッシーニのポラッカとパエールのアリア」の改訂版をHPに掲載します。(2011年10月改訂)

ロッシーニの「ポーランド風 Polacca」

「ポーランド風」を意味する音楽用語 Polacca または alla Polacca [伊] は、17～18 世紀に広く使われ、大バッハもポラッカの名称を管弦楽組曲やさまざまな器楽曲に用いている。しかし、オペラの楽曲、とりわけ歌のナンバーでの使用はあまり例がなく、私が明確な用例と記憶するのもロッシーニ作品においてである。

最初に誰もが気づく曲として、《ランスへの旅 (Il viaggio a Reims)》(1825年)のフィナーレでメリベア侯爵夫人の歌う〈勇ましい戦士のために (Ai prodi guerrieri)〉を挙げておこう。メリベア侯爵夫人はポーランド貴族の設定で、彼女はトロンボク男爵に「ポーランドのスタイル (in stil polacco)」による歌を披露するよう求められ、これを歌うのだ。全集版も曲頭に「(Polacca)」と括弧付きで記し、その伴奏リズムは一般にポラッカとされるものと同じである(譜例1)。

譜例 1:《ランスへの旅》フィナーレのポラッカ
(Il viaggio a Reims, Ricordi, 2006., p.439)
標準的なポラッカのリズム



ちなみにシドニー卿のアリアに挿入されるエキゾチックなリズムの女声合唱も、ポラッカの一種と思えぬこともない。それは次の伴奏音型を持つからである(譜例2)。

譜例 2:シドニー卿のアリアに挿入される女声合唱の冒頭(ibid., p.200.)

ロッシーニはこれ以前にも、有名オペラでポラッカを用いている。《セビーリヤの理髪師 (Il barbiere di Siviglia)》第2幕の小フィナーレがそれで、これは『グローヴ音楽・音楽家事典』の項目「ポラッカ」において、19世紀オペラの用例の一つに挙げられている。前奏部分の楽譜を掲げてみよう(譜例3)。

譜例 3:《セビーリヤの理髪師》の小フィナーレ
(Il barbiere di Siviglia, Ricordi, 1973., p.448)

但し、これが純然たるポラッカなのか疑問の余地もある。この第 2 幕小フィナーレは書下ろしではなく、音楽はピアノ伴奏カンタータ《アウローラ (Aurora)》(1815 年 11 月 25 日作曲) の三重唱(終曲)を改作転用で、その主題はロシアの民衆歌から採られたとされるからである¹。事実なら、ロシア起源の旋律をポラッカ風にアレンジしたものとなる。

ロッシーニは《セビーリヤの理髪師》に先立ち、ポラッカもしくはこれに類似した様式の音楽をオペラに用いている。《タンクレーディ (Tancredi)》(1813 年) の第 2 幕アンサンブル・フィナーレ〈この甘美なときめきのなか (Fra quai soavi palpiti) もその一つである(初演版ハッピーエンド・フィナーレ。譜例 4)。²

譜例 4:《タンクレーディ》第 2 幕フィナーレ
(Tancredi, Ricordi, 1991, p.390.)

The image shows a musical score for the finale of Rossini's opera Tancredi. It features a vocal line for AMENAIDE and a piano accompaniment. The tempo is marked 'Allegro'. The lyrics are: 'Fra quai so - a - vi pal - pi - ti bril - lar mi sen - to il co - re! un de - li - zio - soar - do - re gio - ir, lan - guir mi fa...'. There are also markings for '[Tutti]' and '[Arobi]'.

ロッシーニは特に Polacca と記していないものの、《タンクレーディ》のそれが同時代にポラッカと理解されたことは、1817 年にウィーンのメケッティ社 (Mechetti) による楽譜の単独出版で〈最後のフィナーレのポラッカ ; この甘美なときめきのなか (Polacca nell'ultimo finale; Fra quai soavi palpiti) 〉と題されたことでも判る (Mechetti, Wien, 1817. 版刻番号 468)。

パエールのアリアを改作した《タンクレーディ》の小フィナーレ

私はこのアンサンブル・フィナーレを、若きロッシーニの瑞々しい感性きらめく名曲と思ってきたが、近年これと酷似する音楽をフェルディナンド・パエール (Ferdinando Paer, 1771-1839) の作品に発見して愕然とした。それがオペラ・ブッフア《色事 (L'intrigo amoroso)》(ジョヴァンニ・ベルターティ台本。1795 年 12 月 4 日ヴェネツィアのサン・モイゼ劇場初演) のアリア〈ただ 15 分だけ (Un solo quarto d'ora)〉である。パエールのアリアとロッシーニのフィナーレを並べて比較すれば、そこに驚くべき相似のあることが理解されるはずである (譜例 5)。

譜例 5: パエールの旋律とロッシーニの旋律の比較

The image compares two musical motifs. The top part shows a motif from Paer's opera 'L'intrigo amoroso' with the lyrics 'Un so - lo quarto do - ra lo star con chi sa do - ra in'. The bottom part shows a motif from Rossini's 'Tancredi' with the lyrics 'Fra quai so - a - vi pal - pi - ti bril - lar mi sen - to il co - re! un de - li - zio - soar - do - re gio - ir, lan - guir mi fa...'. The motifs are shown in a way that highlights their similarity.

私はこれが単なる他人の空似ではなく、ロッシーニがパエールのアリアをあらかじめ知り、その主題を改作して用いたと推測している。ロッシーニはしばしば旧作の最初の数小節を発端にアレンジして新たな旋律に作り変える手法を用い、素材は必ずしも自分の作品に限ったことではないからである³。パエールのオペラはロッシーニ

¹ カンタータ《アウローラ》については世界初録音の CD 解説を参照されたい (ebs records gmbb ebs6080)。
² 他の初期作品では、《ひどい誤解 (L'equivoco stravagante)》(1811 年) N.8 ロザリーアのアリア〈あの愛の抜け目なさを (Quel furbarel d'amore)〉と、《ブルスキノ氏 (Il signor Bruschino)》(1813 年) 第 7 曲ソフィーアとガウデンツィオの二重唱〈美しき絆が (È un ben nodo)〉のカバレッタもポラッカの一種と理解する。
³ ロッシーニの作曲法に他作曲家の音楽の編曲や改作が含まれることは、2011 年 10 月 16 日に行った日本ロッシーニ協会例会講演「《セビーリヤの理髪師》の解説 (ロッシーニの作曲法の特異性と受容の変遷)」により筆者が明らかにした。これに関する論文は後日『ロッシーニアーナ』に掲載予定。

